

# JIRON KOHRON III

合意なき離脱や撤退も現実味帯びる

## 暗礁に乗り上げた

## 英国のEU離脱交渉

経済ジャーナリスト

八雲豊彦

### 「ポスト・メイ」を巡る動き

英国のEU（欧州連合）離脱問題が暗礁に乗り上げている。EUと条件を合意せずに飛び出してしまう案も辞さない一方、国民投票で決まった離脱の撤回も浮上している。「喧嘩別れ」か「ご免なさい」か。

両極端なブレグジットの背景に、テリーザ・メイ首相率いる保守党の内紛と経済の先行きの不安感があつた。「英国はあらゆる結果に備える用意がある」

2017年10月3日、英中部、マンチエスターであった保守党大会。EUとの交渉に責任を持つデービッド・デービス欧州連合（EU）離脱担当相が、協議で期待が叶わなければEUとの合意なしに離脱する可能性をほのめかした。英国が支払う清算金「手切れ金」などを巡り膠着している離脱交渉で、EU側に圧力をかけ

る狙いが見られるが、現実となれば経済への影響は計り知れず、会場をどよめかせた。

ブレグジットは2016年6月の国民投票で52%の得票を得て決まった。残留派だった当時のデービッド・キャメロン首相は投票結果の責任をとり7月に退任。メイ政権によって交渉準備が始まった。党内でそれほど離脱への支持を鮮明にしていなかったメイ首相は就任後、投票結果におののいたのか、関税を撤廃して全面的に離脱するハードブレグジットへ傾倒。EUへの単一アクセスも拒否する案を2017年1月に打ち出し、3月にはEUに対し2年後の離脱を正式に通告した。この過程で、EU共通市場へのアクセスを残す党内のソフトブレグジット派との党内対立が激化。英国の方針が決まらず交渉は膠着化することになった。

EUの原則は「モノ、ヒト、カネ、

サービスの4つの移動の自由」。離脱

決定の原動力となった移民への国民の嫌悪を背景に、「ヒト」の移動制限を柱にハードブレグジットに傾いたメイ首相だったが、ソフトブレグジット派の意も汲み、「カネ」の移動の自由を確保したいという戦略で交渉に臨もうと党内調整。原則を重視するEU側にとつては「都合がよすぎる姿勢」と映り、水面下の交渉は全く進まなくなった。

この間、英国内では、海外企業の投資の減少が進み、離脱による金融街シティーの崩壊や外資企業の国外避難による経済停滞への懸念が拡大。金融市場では、先行き不透明感が投資家によるポンド売りを招いた結果、輸入物価が高騰、生活に影響を及ぼすようになった。排他的な国内世論に不安を感じた移民が帰国の動きを見せると、熟練労働者不足をもたらし、英国民が自ら下した大

胆な決定に後悔も目立ち始めた。

英世論調査会社「YouGov」が6月に実施した世論調査で、離脱が「間違い」と回答したのが45%で半数を超えなかったものの、「選択は正しい」の44%を上回った。

窮地挽回とばかりにメイ首相は交渉を始めるに当たり、政権基盤を盤石にしようと6月8日に総選挙を前倒して、賭けに出た。しかし、結果は裏目に。保守党は過半数割れの惨敗となり、メイ首相は、たつた10議席のために、北アイルランドの保守政党「民主統一党（DUP）」と連立を組まざるを得なくなった。

離脱交渉を中ぶらりんの内閣で臨まなければならなくなったメイ首相。選挙結果に党内の対立は「ポスト・メイ」を巡る抗争に発展した。メイ首相がEUとの交渉を拂らせようと、単一市場へのアクセス維持のため資金を拠出し続ける「スイス・モデル」



正念場を迎えたメイ英首相

の採用を臭わせると、強硬離脱派で国民投票をリードしたボリス・ジョンソン外相が、辞任の用意を党内関係者に喧伝する事態に発展。これに対し、ソフトブレグジットを模索していたフィリップ・ハモンド財務相が、20日に英中銀イングランド銀行のマーク・カーニー総裁とシティーでの定例講演で、ブレグジットに伴うリスクに言及。7月に入ると、支持議員を集めて勉強会を開いた。ハモンド外相は、ジョンソン外相がポスト・メイの有力候補とされていただけに、ソフトブレグジット派や離脱反対派の議員を糾合し対抗しようとしたと見られる。

脱担当相が「合意なし交渉」を示唆した演説に続いてジョンソン外相の発言が注目されたが、「閣内は一言一句、総て一致している」と協調姿勢をアピール。デービス離脱担当相の交渉を巡る勇ましい発言に氣をよくしたようだった。

「ブレグジットテキジット」

本当にメイ政権が離脱交渉の椅子を蹴つたらどうなるのだろうか。この場合、EUもこれまでなかった関税の復活を強硬に押しつけてくるのが容易に想像される。また、金融マーケットを大混乱に陥らせ、金融機関大手のシティーからの撤退も一斉に始まり、黄昏の大英帝国を挽回させた金融立国も崩壊し、経済へのダメージは想像もつかない。

ちよつとあり得ない選択をちらつかせたのは、EUに対するブラフと関係者は見るが、最大野党、労働党はメイ首相の指導力を批判し、政権奪回のため離脱反対の意見を組み入れ、EUとの交渉打開を訴えている。2017年9月27日にイングランド南東部のブライトンで3日間の日程を終えた英国最大野党、労働党の大会。ジェレミー・コービン党首は政

権交代への自信とともに、ブレグジットに關し「残留派と離脱派の統合を進めることができるのは労働党」と発言した。党内離脱強硬派に揺さぶられ長引いてしまった、保守党によるEUとの交渉の打開策として、政権奪取後、労働党が残留派の意見を組み入れ、EUと柔軟な話し合いを続ける姿勢を示した恰好となる。「労働党は離脱を骨抜きにすることで政権を狙っている」。指導力をなくしつつあるメイ首相の後を狙う、強硬離脱派と残留派双方の党内抗争に嫌気が差した国民の気持ちを変換する姿勢が伺われ、世論次第では離脱決定を覆す準備があることを予測した政界関係者も少なくなかった。

「ブレグジットテキジット」——。今、英国では舌を噛むような言葉が流行っている。ブレグジット(離脱, *brexit*)からの脱出(*exit*)。元外交官のジョン・カー卿や北大西洋条約機構(NATO)のジョージ・ロバートソン元事務総長らスコットランドの元官僚らが、7月に離脱交渉の中止を求めてから語られ、トニー・ブレア、ジョン・メイジャー両元首相も訴えている。メイ政権が混迷を深める中、後悔した世論に押される形で

生まれた撤回案だが、EU離脱手続きを規定したEU条約第50条の起草者でもあるカー卿は「離脱申請後でも撤回は可能」と言う。

今夏、英国経済はポンド下落で株価が高止まりし、輸入物価が高騰したことで利上げ観測が台頭し、ドルやユーロに対しポンドが急騰した場面があった。しかし、メイ政権の迷走と具体的な議論にならない離脱交渉に不透明感が覆われ再び下落。乱高下の様相を呈している。今後、離脱交渉では「手切れ金」の額が焦点となりそうだが、閣内が分裂している現状では、具体的な金額を明示できるまでに時間はさらにかかりそうだ。交渉では双方に「秩序だった離脱」を目指すことが原則となっているが、英国紳士の威厳で「椅子を蹴飛ばす」か、EUを事実上、牽引するドイツに歴史的な恩讐を超え「謝る」か、という極論の台頭は、定まらない英国の交渉方針の現状を物語っている。公式交渉が始まって4カ月になるが、具体的なことは何も決まっていないブレグジット。交渉期間は原則2年間で、2019年3月末までに離脱協定に合意しなければならぬ。英国はどう出るのか。正念場を迎えている。